

研究成果のプレスリリース：準備から報道まで

村宮悠介

深田地質研究所

Press release of research results: process from preparation to coverage

MURAMIYA Yusuke

Fukada Geological Institute

要旨：科学研究の多くは、公的資金の支援によって成り立っている。このため、研究成果を発信し社会に還元することは、研究者の重要な責務のひとつと言えよう。各種メディアによる報道は成果発信の代表的手法である。そのためにはプレスリリースを行う必要があるが、その準備は慣れていないと難しい。そこで小論では、筆者の経験を元に、プレスリリースの準備から報道までの過程を紹介する。プレスリリースと実際の報道を受けて、一般向けの科学雑誌での成果紹介、新聞の特集記事に関する取材、博物館友の会での講演、YouTube チャンネルへの出演などの依頼があった。このような反響から判断して、今回行ったプレスリリースと報道は、研究成果の社会への発信という意味で効果があったと考えられる。

キーワード：記者発表、広報、プレスリリース、報道、メディア

Abstract: The most scientific research is supported by public funds. Therefore, sharing research results with society is important duties of scientists. Media coverage is a major way to disseminate research results, however, its preparation is difficult especially in the case of the first time. In this article, the process from preparation of press release to media coverage is shown based on the experience of the author. Following the press release and media coverage, I received requests for introduce the results in a scientific magazine, an interview for a feature article in a newspaper, a lecture at a museum event, and an appearance on a YouTube channel. Judging from these responses, the press release and media coverage were effective in terms of disseminating the research results to society.

Keywords: media, media coverage, press conference, press release, public relations

1. はじめに

ふつう、科学研究には、多かれ少なかれ資金が必要である。この資金源には、公的資金、第三者からの寄付金、個人または各組織自身が持つ資金などがある。企業が営利目的で行う研究を除けば、科学研究における研究費の多くは、税金を原資とした公的資金によって賄われている。従って、

研究成果を社会に発信し還元することは、研究者の重要な責務だと言えよう。

研究成果を社会に発信する方法として、展示、講演会、機関誌や SNS への記事掲載、メディアによる報道などがある。中でも報道は、媒体によっては情報を数百万人以上に届けることができるため、研究成果を広く発信する点では特に効果が大きいと考えられる（例えば、読売新聞の朝刊

は、2019 年時点では毎日約 800 万部が発行されている [URL1])。研究成果が報道されるには一般的にプレスリリースを行う必要があるが、それには様々な準備が必要である。大学などの大規模な研究機関であれば、選任の広報担当スタッフが配置されており、準備に際して適切な指示と助言を受けることができるだろう。しかし、小規模な機関では、選任の広報担当スタッフが配置されていないこともある。この場合、研究者自らがインターネットや知り合いの研究者などから情報を集めつつ、手探り状態で準備を進めることになる。特に初めての場合は、どのような段取りで準備を進めれば良いかを把握するまでに、特に時間を要すると思われる。実際、筆者もこの段階にもっと多くの時間を費やした。そこで、小論は、特に初めて研究成果のプレスリリースを行う場合の参考とされることを期待して、筆者の事例を紹介する。ただし、ここで紹介する手順や方法などを採用するにあたっては、筆者が主観的に判断した部分も多い。このため、ここで紹介するものは必ずしも最適とは限らない。あくまで一つの事例として捉えて頂ければ幸いである。

2. 準備から報道まで

筆者は新属新種のアンモナイトを記載したという研究成果 (Muramiya and Shigeta, 2021) について、2020 年末にプレスリリースを行った。プレスリリースを行う際、情報を記載した資料 (=リリース資料) を報道機関に提供する場合と、合わせて記者発表を行う場合がある。今回は、記者発表も合わせて行うこととした。ここでは、このときに筆者が実際に行った準備内容を、時系列に沿って紹介する。準備は節番号の順に進めたが、一部は2項目以上を並行して行った。

2.1 情報解禁日時の確認

ニュースは情報の新鮮さが命である。従って、論文が出版されてすぐにニュースとして報じられるようなタイミングでプレスリリースするのが望ましい。ただし、博物館などで研究成果に関連した展示を行う場合には、その開催に合わせてプレスリリースを行う事例も目にしたことがある。一方で、報道が論文の情報解禁日時 (エンバゴ) に先行することはあってはならない。例えば、新種記載をした論文の場合、新しい分類群名が論文の出版日より前に報道で公開されてしまうと、先取権の問題が生じる可能性がある。そこで、論文出版に合わせてプレスリリースするときは、まず、論文の情報解禁日時を確認する必要がある。情報解禁日時は各雑誌の投稿規定に明示されている場合もあるが、そうでなければ、個別に問い合わせる必要がある。筆者の事例では、論文の出版日の 2021 年 1 月 1 日午前 0 時が、論文の情報解禁日時だった。

2.2 記者発表会の日時設定

情報解禁日時と同時に報じられるようにするためには、記者発表会はそれよりも前に行う必要がある。プレスリリースに慣れた研究者の知人によると、記者発表会の日時は、情報解禁日時から 1 週間程度前の平日午後が良いとのことであった。そこで、筆者の場合は、2020 年 12 月 24 日 (木) 13 時 30 分を記者発表会の開始日時と設定した。

2.3 リリース資料の作成

研究成果をニュースとして報じてもらおうとすると、それに関する情報を報道機関に提供する必要がある。このときに用いる資料を、ここでは「リリース資料」と呼ぶことにする。記者発表会

を開催する場合、リリース資料はそれよりも前に作成する必要がある。なお、リリース資料の提供方法は次の項で述べる。

リリース資料には次の情報を記載し、7 ページの資料とした。執筆の際は、専門用語をできる限り使わないこと、また、リリース資料を読んだだけで記事が書けるような内容にすることを意識した。

- ・ 情報解禁日時
- ・ タイトル
- ・ 研究成果の概要
- ・ 研究成果に関する画像
- ・ 研究成果の詳細
- ・ 展示の紹介
- ・ 論文の情報
- ・ 研究者の一言
- ・ 研究者の顔写真
- ・ 記者発表会の案内
- ・ 記者発表会の申込用紙 (FAX 用)
- ・ 別紙資料 (第三者のコメント、用語解説)

情報解禁日時は各ページのヘッダーに赤字で目立つように記載した。タイトルは研究成果を端的に表し、かつキャッチーな文言を盛り込むことを意識して、「北海道中川町から新属新種のアンモナイト化石を発見—若手研究者が大学生時代に採取した化石は 37 年ぶりの新発見—」。とした。概要には、10 行程度で研究成果の内容と意義、掲載される論文の情報を記載した。概要の下に標本写真を付けて、ここまでの内容を 1 ページに収めた。

研究成果の詳細～顔写真までの内容は 2～3 ページにまとめた。研究成果の詳細では、避けられない専門用語には下線と※印を付して、資料の最後で各用語の解説を行った。研究者の一言では、この研究に対する思いと、次に

どのような研究を行いたいといった個人的な感想を紹介した。今回の研究で論文に図示したアンモナイトの実物化石は、発見地である中川町エコミュージアムセンターで一定期間展示をして頂いたが (図 1)、このことも資料内で紹介した。

4 ページ目には、記者発表会の案内 (日時、場所、アクセス情報、駐車場の有無、問い合わせ先)、記者発表会の参加申込み方法、論文情報 (タイトル、著者名、雑誌名、出版日) を記載した。記者発表会は、事前申込みを行わないで当日自由参加とする場合もあるようだが、今回はコロナ対策のため、参加人数を事前に把握できるように事前申込み式とした。

5 ページ目には FAX 用の申込み用紙を付けた。ここには、社名・参加人数・代表者名・連絡先を記入する欄を設けて、送り先の FAX 番号を記載した。

6～7 ページ目には、研究成果に関する参考情報 (今回は、アンモナイトが見つかった場所の地図と記載したアンモナイトの詳しい特徴)、第三者のコメント (研究成果の意義について)、用語解説を記載した。



図 1 中川町エコミュージアムセンターでの展示の様子。(写真は同館の疋田吉識博士提供)

なお、タイトル～論文の情報までが記載された資料は、深田地質研究所のホームページから入手できる [URL2].

2.4 リリース資料の投げ込み

報道機関へ情報を提供する方法は様々ある。例えば、研究所のホームページに「プレスリリース」といったページを作り、そこにリリース資料を掲載する方法がある。しかし、特に小規模な研究機関の場合、ただそこに掲載しておくだけでは、情報が報道機関の目に留まることは稀だと思われる。そこで、情報を報道機関へ能動的に提供する必要がある。これは「投げ込み」と呼ばれている。

リリース資料を報道機関に投げ込むとき、まず、投げ込み先を選定する必要がある。ただし、広報部などに投げ込み先リストが準備されている場合は、この作業は必要ない。筆者の場合は、投げ込み先の選定から行った。今回は、大手の報道各社（新聞社、テレビ局、通信社、web メディア）に加えて、研究内容が北海道のアンモナイトに関するものだったので、北海道の地方新聞社にもリリース資料を送付することにした。

報道各社は日々膨大なリリース資料を受け取るので、代表のメールや FAX で投げ込みをすると、ほかの情報に埋もれてしまい、担当の記者の目に留まることは少なくなってしまう。そこで、担当の部署（今回の場合は科学部など）に直接投げ込むのが良いと思われる。しかし、部署個別の連絡先は公開されていなかったのので、代表の問い合わせ番号に電話をして、担当部署のメールアドレスと FAX 番号を尋ねることにした。多くの場合は、メールと FAX でリリース資料を受け付けていたが、郵送のみで受け付ける報道機関もあった。

メールと FAX で受け付けている報道機関には、その両方を使って、記者発表会の 3 日前に投げ込

みを行った。ちなみに、報道機関に勤める知人によると、メールよりも FAX、つまり紙の状態で投げ込んだ方が、担当者の目に留まりやすいそうである。また、もっとも効果的なのは、担当者（記者）に直接投げ込むことである。今回は、報道機関に知り合いを持つ深田研職員から、いくつかの機関の担当者に直接投げ込んでもらうことができた。

2.5 当日資料の作成

記者発表会で研究成果の内容を説明するために、パワーポイントのスライドを作成する必要がある。ゆっくりと話して 15 分以内で完了できる分量とすること、また、できる限り専門用語を用いないことを意識して作成した。内容は、リリース資料でも説明したことに加えて、そこには書き切れなかった研究に到るきっかけや調査風景なども紹介した。

2.6 会場準備

会場は、スライドを映すスクリーンがあって、写真を撮りやすいように明るく綺麗な部屋を選んだ。会場は図 2 のように配置した。記者はその場でメモを取る必要があるのので、机を用意した方が良いと思われる。また、今回は論文に図示したアンモナイト化石（実物）を展示し、写真撮影ができるようにした（図 3）。ラベルの学名は、アルファベットとカタカナの両方で表記した。化石が白っぽい色をしているので、背景には黒色のフェルトを用いた。

2.7 記者発表会当日

当日は次のような流れで行った。

- ・ 13 時 00 分：受付開始
- ・ 13 時 30 分：挨拶

- ・ 13 時 30 分～13 時 45 分：発表
- ・ 13 時 45 分～14 時 00 分：質疑応答
- ・ 14 時 00 分～：取材・写真撮影

質疑応答では、今回発見されたアンモナイトの生態（食性・生息姿勢など）に関する質問が多かった。このため、古生物学に関する記者発表会では、復元図を用意するとイメージをつかんでもらうのに効果的と思われる。

2.8 後日取材と画像提供

場合によっては、記者発表会後に追加で取材や内容の確認を求められることがある。今回は4つのうち3つの機関から、後日の取材と内容確認があった。また、画像の提供も求められた。今回は、標本と調査風景の画像を提供した。

2.9 実際の報道

今回行ったプレスリリースを受けて、筆者が把握している限り、新聞9紙（うち2社は独自取材の記事を、残り7社は通信社経由の記事を掲載）、webメディア多数（例えば [URL3]）で報じられた。

3. 報道の反響

報道の後、一般向け雑誌への画像提供、新聞の特集記事に関する取材、博物館友の会の講演会への出演、YouTube チャンネルへの出演などの依頼があった。

4. 改善すべき点

まず、論文の情報解禁日時は早めに尋ねるべきだった。今回は、12月4日に問い合わせをし、そこから12月24日に向けて具体的な準備を開始し

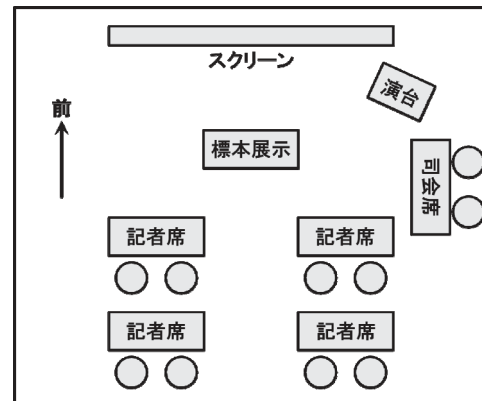


図2 会場の配置。

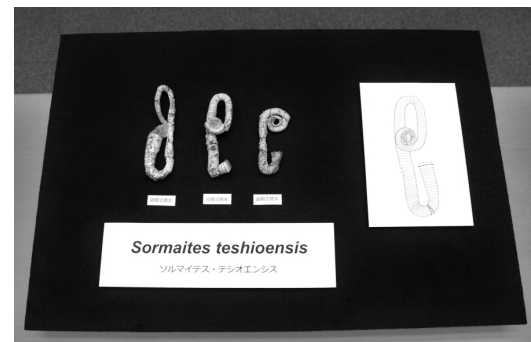


図3 記者発表会場での展示の様子。

たので、余裕のない日程になってしまった。今回の論文が掲載された雑誌は、受理から出版までの期間が長く、前もって出版日（今回は出版日が情報解禁日）を尋ねておけば、余裕を持って準備をすることができたはずである。受理から情報解禁日までの期間が短い雑誌の場合は、受理される見込みが得られたら、受理前からでも準備を始めるという良だろう。

次に、アンモナイトが生きていた時の姿をイメージできるような復元図を用意するべきであった。アンモナイトは絶滅してしまっているうえに、今回記載したアンモナイトは異常巻きで、化石からだけでは、生きていたときの姿（食性・生息姿勢など）がイメージしにくかったと思われる。復

元図は、それらをイメージする助けとなると思われる。復元図の作成を第三者に依頼する場合は、それを実際の報道でも使用できるような権利状態にしておくとなお良いだろう。

5. まとめ

小論では、筆者が行ったプレスリリースについて、実際に行った準備の過程、報道の反響、および改善すべき点を紹介した。準備は、情報解禁日時の確認→記者発表会の日時設定→リリース資料の作成→リリース資料の投げ込み先の選定と投げ込み→当日資料の作成→会場準備の順で行った。プレスリリースの内容は、記者発表を経て、新聞9紙と多数のwebメディアで報じられた。その結果、講演会の依頼などの反響があった。このような反響から判断して、今回行ったプレスリリースは、研究成果の社会への発信という意味で効果があったと考えられる。

謝辞

今回、プレスリリースを行うに当たって、瑞浪市化石博物館の安藤佑介博士には、実際の経験を基にしたノウハウをたくさんご教示頂いた。氏のご助言がなければ、準備は大変難しいものになっていたと思われる。中川町エコミュージアムセンターの疋田吉識博士には、標本の展示についてご協力頂いた。また、展示風景の画像を提供頂いた。ここに記して心より感謝の意を表します。

文献

Muramiya, Y. and Shigeta, Y. (2021): *Sormaites*, a new heteromorph ammonoid genus from the

Turonian (Upper Cretaceous) of Hokkaido, Japan. *Paleontological Research*, **25**, 11–18.

[URL1] <https://adv.yomiuri.co.jp/mediadata/> (2021年8月24日閲覧)

[URL2] <https://fukadaken.or.jp/?p=6032> (2021年8月26日閲覧)

[URL3] <https://www.asahi.com/articles/ASND064CFNDZULBJ007.html> (2021年8月31日閲覧)